

授業科目名・形態	臨床薬理学	講義	必修・選択の別	必修	単位数	2
科目担当者氏名	早狩 誠		実務経験の有無	有	開講期	2年前期

【授業の主題】

臨床薬理学は、薬理学で学んだ薬物の作用機序や有害事象に関する基本的な知識が、臨床の場面でのどのように応用されているかを学ぶ場である。

【到達目標】

薬物が臨床試験を経て上市される過程を学び、上市された薬物の有効性は、併用薬剤や年齢等により効果が変動することを学ぶ。この違いの例として薬物代謝酵素の遺伝子多型によることを学ぶ。各講義で学ぶ薬物療法の注意点等の知識を有していることは、看護業務において薬物の有効性評価や有害事象の発現の早期発見に繋がる。

【授業計画・内容】

- 第 1 回 臨床研究・治験の概要：臨床試験精度制定の歴史的背景
- 第 2 回 臨床研究および治験等での医薬品の安全性・有用性の評価
- 第 3 回 薬物の作用機序および薬物動態
- 第 4 回 医薬品の管理・中毒・濫用薬物
- 第 5 回 アレルギー反応の発症機序および対処法および血栓症治療薬
- 第 6 回 薬理遺伝学 1：遺伝子多型が薬理作用に影響を及ぼす薬剤 I
- 第 7 回 薬理遺伝学 2：遺伝子多型が薬理作用に影響を及ぼす薬剤 II
- 第 8 回 高齢者の薬物療法 1：高齢者の薬物療法への留意点
- 第 9 回 高齢者の薬物療法 2：高齢者の薬物療法への留意点
- 第 10 回 妊婦への薬物療法
- 第 11 回 授乳婦人への薬物療法
- 第 12 回 殺菌作用を封する抗生物質の作用機序および有害事象
- 第 13 回 静菌作用を有する抗生物質の作用機序および有害事象
- 第 14 回 細胞周期を抑制する抗がん剤の作用機序および有害事象
- 第 15 回 分子を標的にする抗がん剤の作用機序および有害事象

【授業実施方法】

基本的には講義形式で行う。

【授業準備】

各授業に関連する薬剤についての基礎的知識を薬理学の教科書で予習しておくこと。

【主な関連する科目】

薬理学、生物化学、生理学

【教科書等】

特になし

【参考文献】

特になし

【成績評価方法】

授業中に小試験を 10 回以上行う。成績評価は小試験結果（約 90%）および授業態度 10%を加えを総合的に評価する。

【実務経験及び実務を活かした授業内容】

診療施設で生じた薬物療法等に関する有害事象等を講義で紹介し、現場で生じる多くの有害事象を察知できる能力を身につけられるように、常に現場にいるような講義を行う。

【学生へのメッセージ】

講義内容は科学用語が多く理解しにくい可能性があるが、常に自分が医療の現場に身を置いている状況を想定し授業に臨む事によって、理解度が上がるはずである。得た知識を貴重な情報源として将来の業務に役立ててほしい。